

# ネギの黒腐菌核病のポイントをピックアップ!!



**殺菌剤 カナメ フロアブル**

ねぎ病害防除の要、  
現る。

殺菌剤分類 7  
有効成分：インビルフルキサム…37.0%  
農林水産省登録 第24265号  
カナメ・KANAMEは住友化学(株)の登録商標

●使用前にはラベルをよく読んでください。●ラベルの記載以外には使用しないでください。●小児の手の届く所には置かないでください。●空袋・空容器は農場地等に放置せず適切に処理してください。

カナメフロアブル普及会 協友アグリ株式会社

## ネギ病害虫防除のポイント

### 圃場全体の土壌消毒と早期発見

ネギ栽培では毎年のように病害虫に関する特殊報・注意報が発令されている。本特集では、埼玉県農業技術研究センターの宇賀博之氏に、多発すると深刻な被害となる黒腐菌核病と生育抑制を引き起こすネダニ類について防除のポイントを解説してもらった。

ネギは作付けされる圃場(ほじょう)面積が広く栽培期間も長く、生育する生き物が単一化されやすい(多様性が失われやすい)。また古くから害虫忌避植物として知られている通り、天敵などが定着しにくい傾向にある。

このような条件下では、さまざまな病害虫が発生する。地上部病害には黒斑病や葉枯病、べと病、さび病など、地下部病害には黒腐菌核病や白絹病、軟腐病、紅色根腐病などがある。

地上部害虫はネギアザミツマ、ネギハモクリバエ、ヨトウムシ類、ネギリムシ類などが発生し、地下部害虫は、ネダニやネコセンチュウに、発生地域が限られているネギネクロバネキノコバエによる被害も少なからず見られる。

本特集では多発すると被害が大きい黒腐菌核病と、増殖率が高く苗の生育抑制を引き起こすネダニ類の特徴と防除対策を紹介する。

### 病害 黒腐菌核病の特徴

本病は糸状菌(かび)による土壌病害である。ネギやタマネギ、ニラ、ニンニク、ラッキョウなどの野菜やユリなどの植物に感染する。厳寒期を除く低温時期に発病・まん延する。菌核の形態で越夏(菌糸では越夏できない)、菌核は4年以上生存する。

気温(地温)が20度を下回るころに土壌中に残存する菌核が発芽して主に根から感染する。感染初期は地上部に病徴(びょうちよう)は見



と外葉から黄化、地下部は根が脱落する(写真②)。やがて葉鞘(ようしよ)部に菌糸がまん延して耐久性のある菌核が形成される(写真③)。

一般的に排水良好な砂質土壌や火山灰質軽植土壌で多発するといわれている。一次感染は土壌中にある菌核が植物体と接触することで感染するため、感染株は少ない場合が多い。しかし、ネギは

雌成虫の体長は約1mm、体は乳白色、えんじ色の足が特徴的である。生存に不適な環境条件になると飢餓や乾燥に強いヒポプスと呼ばれる休眠状態になる。増殖率は高く、定植前の初期密度が高い場合は苗の生育が抑制される。また、夏季の極端に乾燥した圃場でも多発することがある(写真⑤)。

作業には多大な努力を要するが、これを怠ると十分な効果が得られず、1、2年で元の被害に戻る危険性があるため、被覆処理は行っていただきたい。

黒腐菌核病の感染株はあまり期待できないため、感染させないことが重要である。具体的には、感染の好適時期と重なる比較的冷涼な春季に定植する場合、定植後の粒剤処理を行い、秋・冬・春では気温が低下する9～11月の土寄せ前の散布

黒腐菌核病の感染株はあまり期待できないため、感染させないことが重要である。具体的には、感染の好適時期と重なる比較的冷涼な春季に定植する場合、定植後の粒剤処理を行い、秋・冬・春では気温が低下する9～11月の土寄せ前の散布

菌核を大量増殖させてしまう。可能な限り菌核が形成される前に抜き取り、適正に処分することが得策である。

ネダニによる被害が大きいのは幼苗期であることが多い。前作で被害が確認された圃場では定植時の粒剤処理を行う。植えた後に坪枯れ状態に被害が確認された場合は、発生した場所を中心に薬剤処理を行うことが



**殺菌剤 カナメ フロアブル**

① 株元散布で黒腐菌核病に高い効果。定植直後や土寄せ前の株元散布で効果を発揮します。

② 白絹病(株元散布)、さび病(散布)にも優れた効果。本剤は担子菌である白絹病菌、さび病菌に高い抗菌活性があり、優れた効果が期待できます。

③ 葉枯病、黒斑病にも有効。散布でさび病、葉枯病、黒斑病の同時防除が可能です。

適用病害の範囲及び使用方法(抜粋)

作物名	適用病害名	希釈倍数(倍)	使用液量(l/10a)	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	インビルフルキサムを含む農薬の総使用回数
ねぎ	さび病	4000~8000	100~300	収穫前日まで	4回以内	散布	4回以内
	黒斑病、葉枯病	4000					
	白絹病	4000~8000					
	黒腐菌核病	4000					

※ねぎ以外の作物にも登録があります。詳細はラベルをご確認ください。

2024年7月現在の登録内容

株を隣接して栽培するところから、一次感染株から隣接株へと広がっていく(二次感染(水平伝播))によりまん延し、低汚染圃場でも被害が大きくなりやすい。

が出現するため、耕種の防除は難しい。気温10度程度以上で活動を行ったため、土壌中で越冬した個体が春に定植したネギ幼苗を加害する。

ネダニと表されるが根節ではなく茎盤部や地下部の葉鞘を加害し、根の伸長抑制や脱落が見られるため生育抑制が起こる。増殖率は高く、定植前の初期密度が高い場合は苗の生育が抑制される。また、夏季の極端に乾燥した圃場でも多発することがある(写真⑤)。

作業には多大な努力を要するが、これを怠ると十分な効果が得られず、1、2年で元の被害に戻る危険性があるため、被覆処理は行っていただきたい。